

新刊紹介

池上寛・大西康雄 編『東アジア物流 新時代―グローバル 化の展望と課題』

池上 寛



アジア経済研究所
2007年

国際貿易は通常何らかの輸送手段によってモノが運ばれ、成り立っている。それを支えているのが、物流である。国際貿易に関する議論は過去膨大な研究が行われてきた一方で、国際物流に関する議論は近年になるまでほとんどおこなわれてこなかった。しかしながら、グローバル化による国際分業の深化によって、物流も大きく変貌している。例えば、東アジアを見ると、製造業に従事する多国籍企業はこれまで以上に国を越えて効率的に部材や部品を移動させ

集積地で組立をおこない、完成品を市場に輸出するといったスタイルを確立している。

そして、その背景としては、製造企業による物流のアウトソーシングが進んだことが挙げられる。多くの製造業ではかつては物流部門を内製化することが多かったが、生産活動のグローバル化にともない、物流を物流企業（利用運送業者を含む）に委託する動きが近年増えつつある。物流企業は荷主企業に替わって物流システムを構築、管理、運営するとともに、彼らに対して効率的な物流サービスを提供するようになった。近年の物流を代表するサービスが、サプライ・チェーン・マネジメントやジャスト・イン・タイムである。

一方、効率的な物流をおこなうためには港湾や空港、道路などのインフラ整備も必須条件である。また、近年では企業の多くが物流の重要性を認識し、工場の新設などの投資をおこなう際には、物流に関するインフラの整備状況も判断材料のひとつに加えるようになってきている。物流環境の整備状況が国の経済発展にも影響を及ぼしつつあるのである。こうしたことから、東アジアの多くの国・地域では港湾や空港のインフラ整備が目白押しで進んでいる。さらに、各国ではハード面での整備だけではなく、通関作業や情報化などのソフト面でも競って整備をおこない、効率的な物流制度を構築しようとしている。

本書は、以上で見たように大きな変貌を遂げながら、東アジアの経済発展をめぐる議論の中ではあまり取り上げられてこなかった物流について、その現状と課題を明らかにしようとした。

本書は内容からみて、三つの部分から構成されている。まず、国際物流を生み出す貿易に関わる事項を検討した部分である。第一章では東アジアにおける域内貿易の発展と現状を分析した。近年の域内貿易比率は以前よりも増加しているものの、北米やEUより低いことが明らかになる。第二章では経済統合に向かおうとするASEANの物流円滑化措置と日系企業へのアンケートからASEANの物流の問題点を検討する。

次に、インフラや物流業者に関する事項を分析した部分である。第三章では、海上輸送と東アジアにおける港湾インフラについての現状を整理し、インフラ整備には外資導入の成否を決める可能性があるとし唆する。第四章では、東アジアの航空貨物輸送と陸上輸送の動向と展望を議論する。陸上輸送ではアジア横断鉄道、アジア・ハイウェイやインドシナ半島部の陸上輸送を取り上げる。第五章では東アジアにおける日系利便運送業者の展開を検討し、展開の背景と主要都市での展開の実態が明らかにになる。

最後に、各国・地域別の物流に係る事項を分析した部分である。第六章では中国に焦点をあてて物流

政策を概観し、地場物流企業を中心にしたケーススタディ、国内物流と国際物流の連結といった視点から今後の課題を提起する。第七章では中国の香港と珠江・長江両デルタの港湾を検討し、これらの港湾が将来地域のハブポートになり得るか、あるいは他の可能性があるのかという問題を中心に分析した。第八章では台湾がアジア太平洋地域における物流拠点を目指すべく実施してきた物流政策を検討し、その効果を検討する。第九章ではシンガポールとマレーシアの港湾インフラとその運用について検討するが、総体的にシンガポールの優位は揺るがないと結論付けている。

東アジアにおける物流は、経済統合や経済発展の動きと歩を合わせるように、近年質量ともに急速に発展している。この動きはしばらく止まることはないだろう。今後東アジアの国際物流がどのように変化していくのか、注視していく必要がある。本書は、アジア経済研究所で初めて実施された物流に関する研究会の成果でもある。もとより物流にかかわる領域はきわめて広汎であり、この報告書で取り上げられなかった事項も多い。しかし、限られた紙数の中で、東アジアにおける物流の現状を多面的に理解できるように努めたつもりである。読者から多くのコメントをいただければ幸いである。

（いけがみ ひろし／アジア経済研究所新領域研究センター）